

まごころだより（私信）

大阪の実家で妹と同居していた 95 歳になる母が、4 月末心筋梗塞で入院しました。幸い 5 月 22 日に退院しましたが、母の表現によると「頭の中が空っぽになり、何も分からなくなって」戻ってきました。

4 月 28 日の夜緊急搬送された母は、一週間後に担当医から急性期は過ぎたが、血液検査で異常値が見つかり、退院はまだ先だと言われました。命に別状はないと分かったものの、詳しい状況が分からず、ずいぶん不安でした。そして入院が長引くにつれ、私たち（母の子供は私と兄それに同居している妹の 3 人）は、病状と共に、母の筋力と認知機能の低下も気にかかるようになりました。というのは、母は極度の難聴で、看護師や医者が話しかけたとしても、なかなか聞き取れません。その上、歩行は不安定で、多少の見守りが必要です。きっと母は一日中ベッドの上で、話し相手もなく過ごしているのだろう。そして、誰も見舞いにも来られない状況は分かっている、一人忘れ去られたような寂しい思いをしているだろうと思ったのです。入院中の母の筋力や認知機能の低下はどうすることも出来ません。でも「寂しさ」はどうにか出来るかもしれないと思い、「一人じゃないよ。忘れてないよ」のメッセージを送ることにしました。

耳の遠い母は 80 歳の頃に携帯電話を持ち、メールでのやりとりも出来るようになっていました。そこで、私は返信の負担がないように、「おはよう、いい天気だね。」「おやすみなさい。ゆっくり休んでね」という挨拶メールを毎日朝晩送り続けました。はじめは一方的なメールでしたが、やがて 3.4 度に一度くらいは「おはよう。ありがとう」という返事がくるようになりました。たった一言の返事でしたが「ああ元気である」と安心したものです。

やがて 5 月 22 日に退院した母は、声もか細く、抱きかかえられるようにして家に戻りました。そして「頭の中が空っぽになった。何も分からなくなった」と言い、何をする気力もなくなっていました。それでも家に戻ってホッとしたのか、表情が穏やかだったのが救いでした。母は退院出来たこと、家の食事を食べられることを喜び、感謝していました。家で 20 数日ぶりにお風呂に入り、家族が作った食事を少しずつ食べるようになり、20 日間の入院で 7 キロも減った体重も少しずつ戻りました。頭の中はまだ空っぽのままのようですが、体力も付いたのでしょう。会いに行くたびに言葉もはっきりするようになりました。

20 余日の入院による母のレベル低下は明らかです。が、私が母に望むことはただ一つ「母が残りの人生を穏やかな気持ちで過ごすこと」それだけです。体力や脚力それに認知機能の低下、それは悲しいことですが、仕方のないことです。体が動きにくくなったことや、頭が空っぽになったことを嘆いている母に、認知度を試してみたり、間違いを指摘したりして悲しい気持ちに追い打ちをかけるようなことはしたくありません。歩行は狭い家が幸いして、見守りは必要ですが伝い歩きで頑張っています。今も母は「頭が空っぽになり何も分からなくなった」と言いながら、穏やかな顔で過ごしています。私は娘としてこの穏やかな表情が一日でも長く続くことを願っています。

久津谷景子